平成28年度第1回ハタハタ資源対策協議会資料

表1　秋田県における漁獲枠と漁獲実績の推移

単位:トン

年	沖合			沿岸			合計		
	漁獲枠	漁獲量	実績(%)	漁獲枠	漁獲量	実績(%)	漁獲枠	漁獲量	実績(%)
平成 7年	85	54	63	85	89	104	170	143	84
8年	110	86	78	110	157	143	220	243	111
9年	180	148	82	180	280	155	360	428	119
10年	300	162	54	300	438	146	600	599	100
11年	400	142	36	600	580	97	1,000	722	72
12年	400	265	66	600	902	150	1,000	1,166	117
13年	520	506	97	780	986	126	1,300	1,493	115
14年	680	384	57	1,020	1,570	154	1,700	1,954	115
15年	960	907	94	1,440	2,051	142	2,400	2,958	123
16年	1,000	707	71	1,500	2,349	157	2,500	3,055	122
17年	1,000	489	49	1,500	1,867	124	2,500	2,356	94
18年	800	944	118	1,200	1,640	137	2,000	2,584	129
19年	720	847	118	1,080	765	71	1,800	1,612	90
20年	1,200	868	72	1,800	2,035	113	3,000	2,903	97
21年	1,040	1,054	101	1,560	1,475	95	2,600	2,530	97
22年	960	457	48	1,440	1,277	89	2,400	1,734	72
23年	1,120	677	60	1,680	1,287	77	2,800	1,964	70
24年	1,080	376	35	1,620	931	57	2,700	1,307	48
25年	768	624	81	1,152	898	78	1,920	1,522	79
26年	672	285	42	1,008	940	93	1,680	1,225	73
27年	320	438	137	480	686	143	800	1,124	141

※　平成9年以降は、沖合は管理漁期(9月～翌6月)、沿岸は漁期(11月～翌1月)の合計値　(水産漁港課調べ)

◎H27年の配分枠に対する実績は、沖合 137 %、沿岸 143 %、全体で 141 %となった。

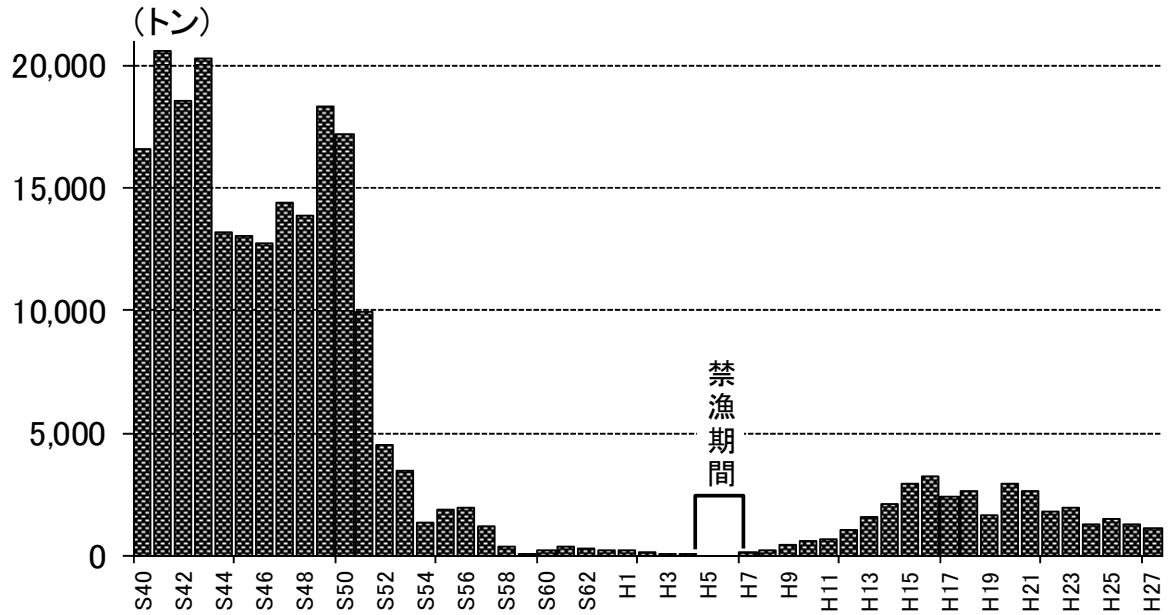

図1　秋田県におけるハタハタ漁獲量の推移

(1-12月漁獲量:H26年までは農林水産統計、H27年は水産漁港課調べ)

◎H27年1～12月の本県漁獲量は 1,149トンで、前年に比べて 約110 トン減少した。

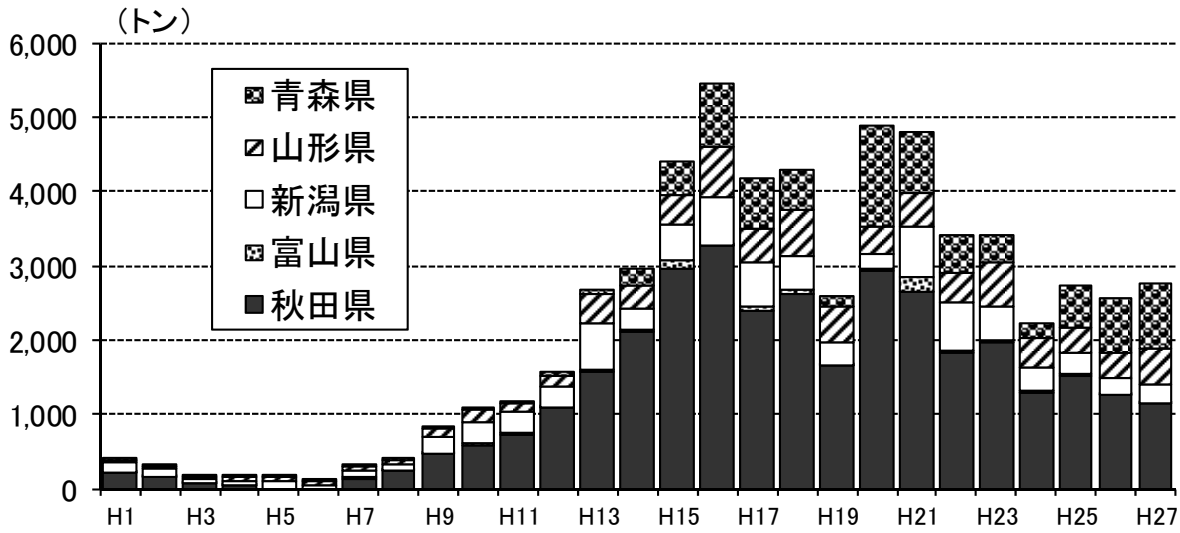

図２　日本海北部5県における漁獲量の推移（H27年は日本海区水産研究所調べ）

◎H27年の5県漁獲量は2,766トンで、前年漁期より 190トン増加した。
◎このうち秋田県の割合は42%で、前年に比べ 7 ポイント低下した。
◎県別では秋田 1,149トン（前年比 91 %）、青森 891 トン（118 %）、山形 469トン（144 %）
新潟 243 トン（110 %）、富山 14 トン（97 %）で、青森、山形、新潟では増加した。

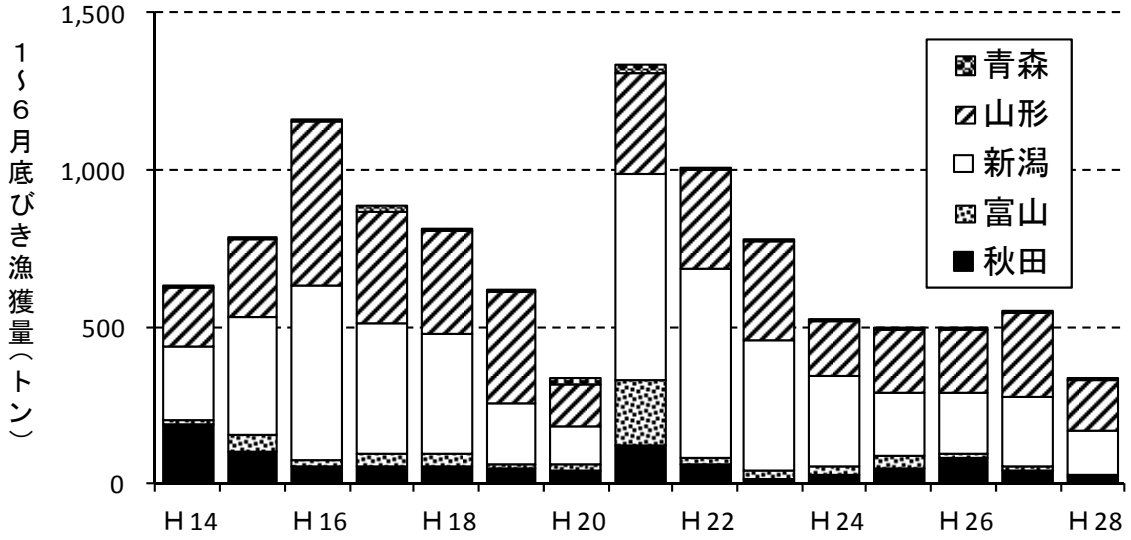

図３　１～６月における日本海北部5県のハタハタ漁獲量

（H27年まで日本海区水産研究所調べ、H28年は水産振興センター調べ）

◎本年１～６月の日本海北部5県の漁獲量は３３３トン で、前年の ６１% に減少した。
各県の漁獲量は、富山5トン（前年比44%）、新潟 146トン（67%）、山形 157トン（58%）、
秋田 21トン（46%）、青森4トン（295%）で、青森でのみ漁獲量が増加した。

●底びき網での調査結果（成魚：１１－１２月）

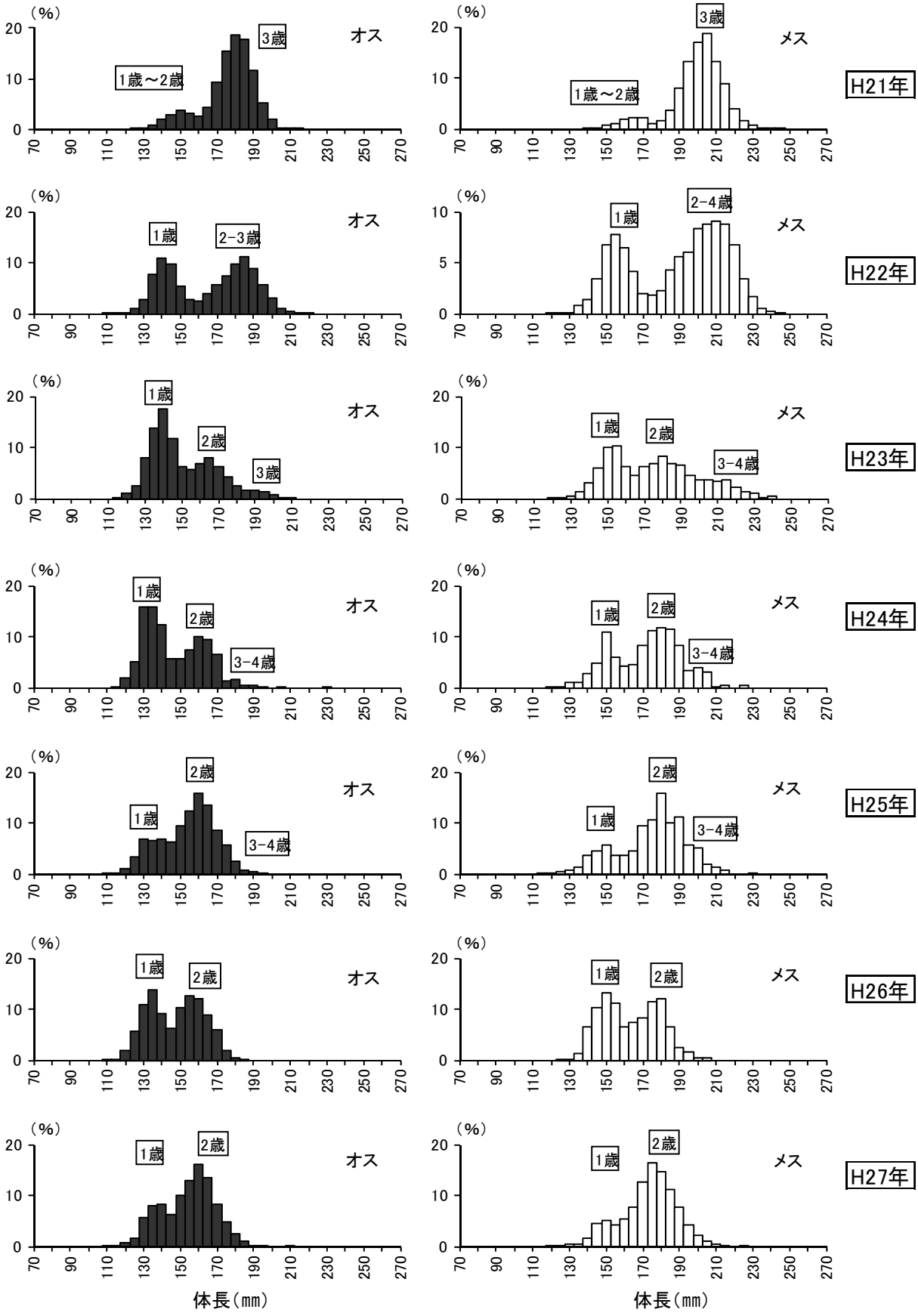

図４　11、12月におけるハタハタ体長組成

【昨年の傾向】

◎H25年生まれ（2歳）が多く、次いでH26年生まれ（1歳）が漁獲された。

◎H23、24年生まれ（3、4歳）の割合は低く、ここ数年は大型が少ない。

●底びき網での調査結果（成魚：４－５月）

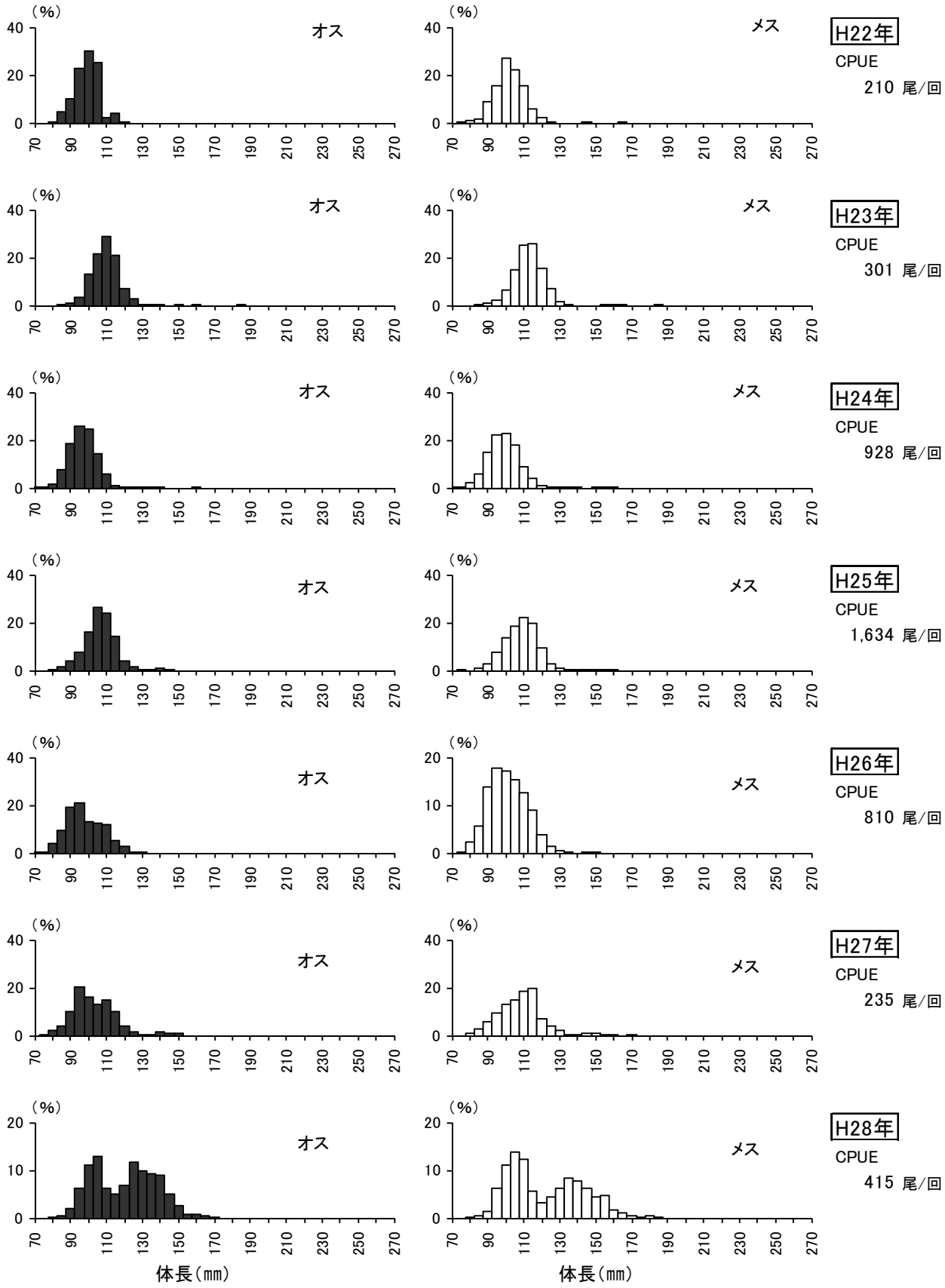

図５　４、５月におけるハタハタ体長組成（水深200m以浅）

（H24年まで第五代千秋丸、H25年以降は第六代千秋丸で実施）

【今年の傾向】

◎春期の水深200m付近に分布するのは1歳が中心であるが、本年は2歳の割合がかなり高かった。

●調査船での調査結果（成魚：９－１０月）

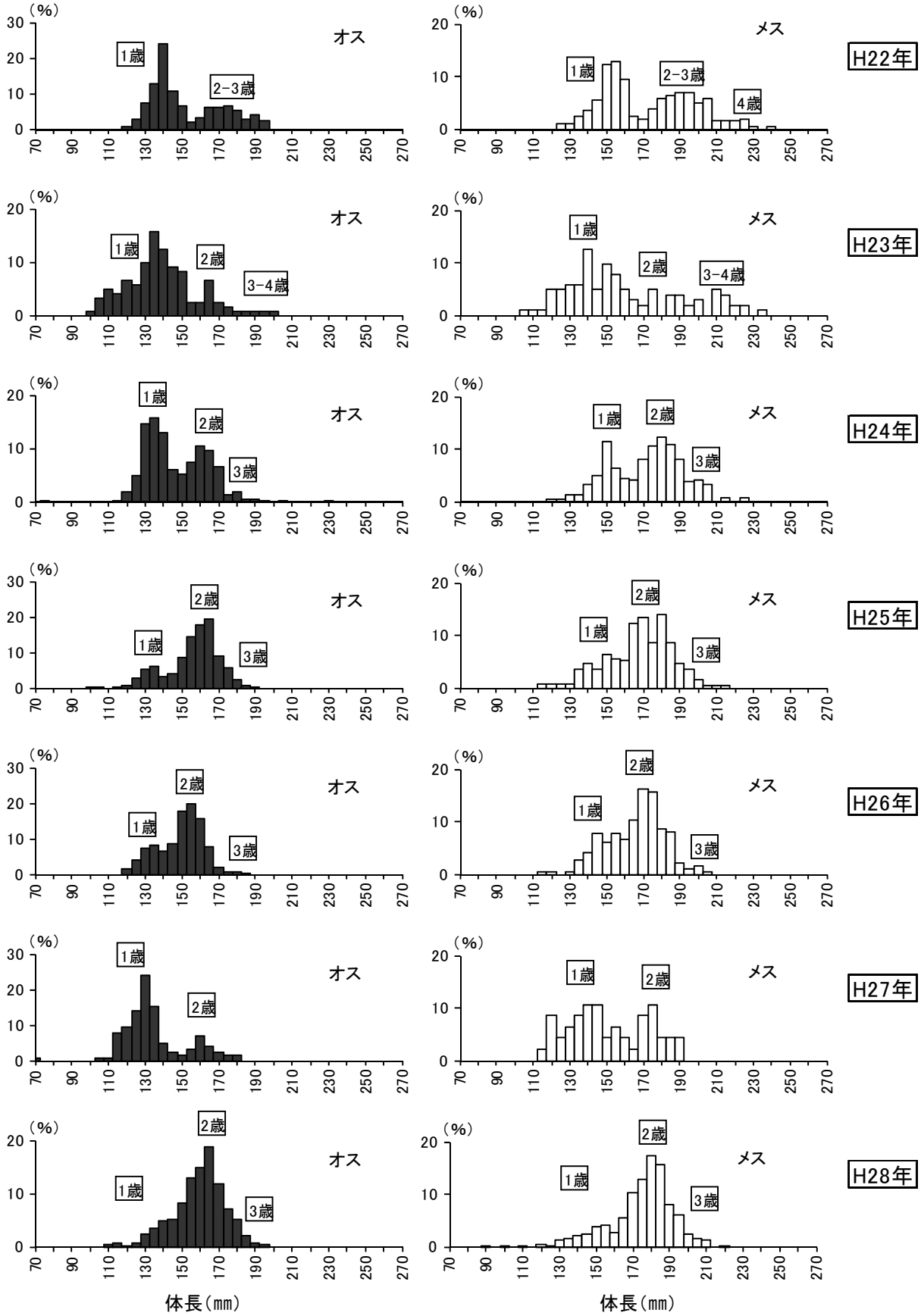

図６　９、10月におけるハタハタ体長組成

（H23年まで第五代千秋丸、H24年は用船調査、H25年以降は第六代千秋丸+民間船ﾃﾞｰﾀ）

【今年の傾向】

◎オス、メスともに2歳（H26年生まれ）が中心であり、3歳の割合も昨年より高い。

◎1歳（H27年生まれ）の割合は、現段階ではかなり低い。

● ハタハタの年齢別の漁獲尾数

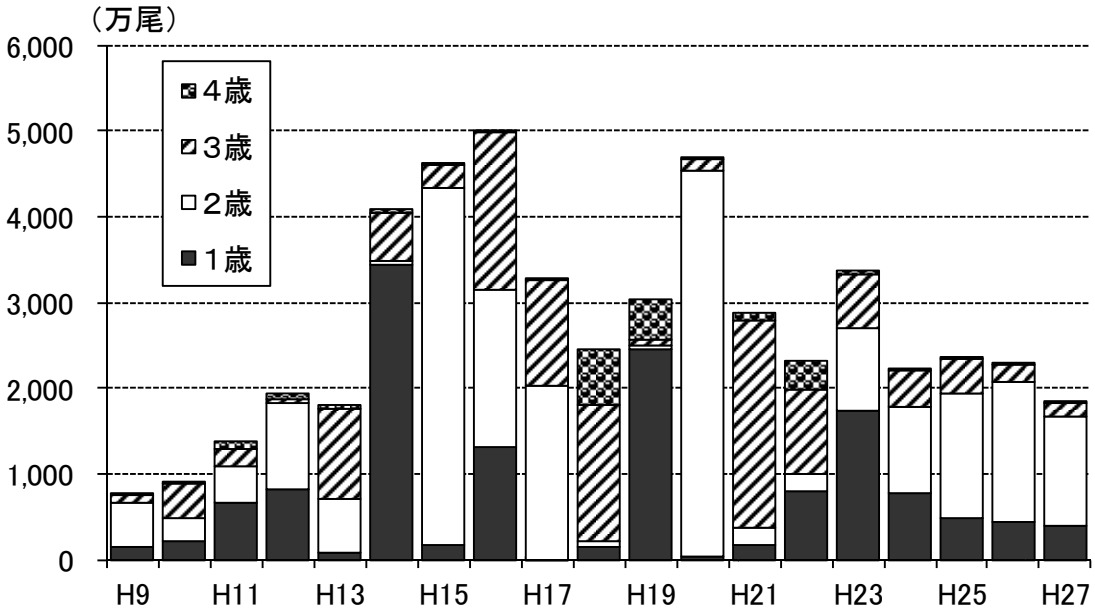

図７　秋田県における年齢別漁獲尾数の推移

◎H27年漁期は、H25年生まれ（2歳）の漁獲割合が最も高く、次いでH26年生まれ（1歳）であった。3～4歳の割合は低かった。

● ハタハタ1歳魚の資源尾数と海水温との関係

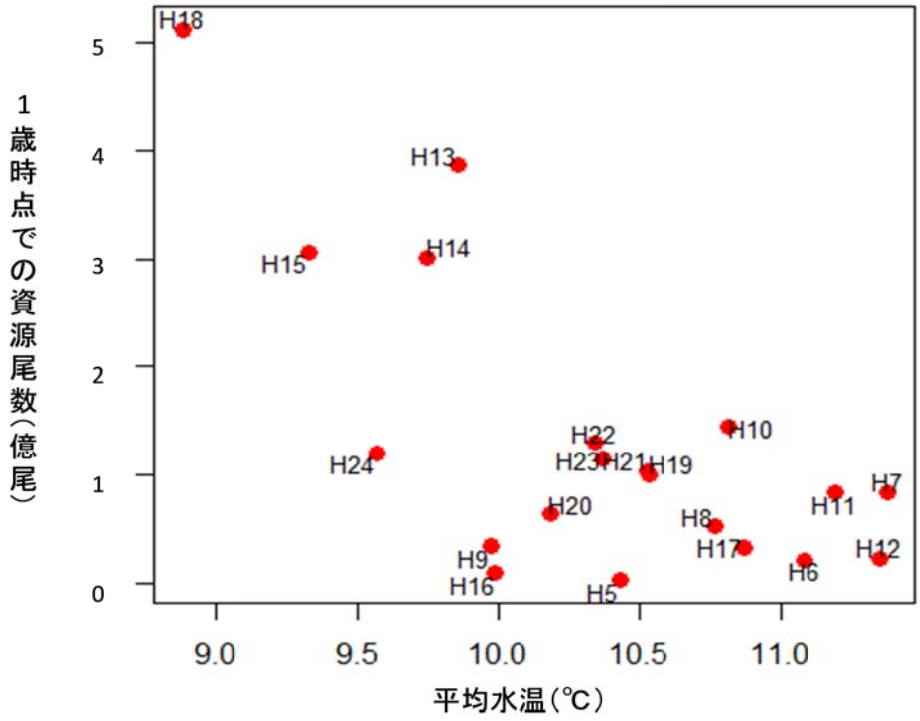

図８　秋田県沿岸の12～1月の海面水温と1歳までの生き残りの関係
（卵の時期の平均水温、年は発生年を表す）

◎H5年生まれからH24年生まれまでの年級群の1歳時点での尾数と、12月～翌年1月までの海面水温の平均値との関係を見ると、平均水温が低い年に生き残りが良くなる傾向がある。

H28年漁期のハタハタ漁獲対象資源量

◎ 2歳魚が中心で3歳魚も比較的多い。

→ 今漁期の魚体は、中型が多く大型も比較的多い。

◎ 解析の結果、秋田県の漁獲対象資源の尾数は 3,100 万尾、重量は約 1,900 ﾄﾝ と推定した。

〔提言〕

青森、山形、新潟県では昨年は比較的好調な漁模様であったが、近年の傾向から本県では今漁期も漁模様が低調に推移する可能性があることから、昨年に引き続き低水準の資源に対応した経営の工夫が必要である。

漁獲物の流通管理体制の強化や価値の一層の向上を図り、漁獲物の有効利用を進めるとともに、小型魚の混獲を減らす取り組みを継続することで、漁獲対象資源の維持を図ることが必要。